

作家・司馬遼太郎の『陸奥のみち』に、こんな一節があります。「どこかの天体から人がきて地球の美しさを教えてやらねばならないはめになったとき、一番にこの種差海岸に案内してやろうとおもったりした」

種差海岸は青森県八戸市東部にある海岸です。下北半島から続く穏やかな砂浜と、三陸海岸の険阻な岩礁、断崖の磯浜の景観が混ざり合う地点です。

海岸には遊歩道が整備され、春から夏にかけて、さまざまな海浜植物が咲き誇ります。景観を保全するために、地域の人を中心にゴミ拾い活動なども行なわれています。

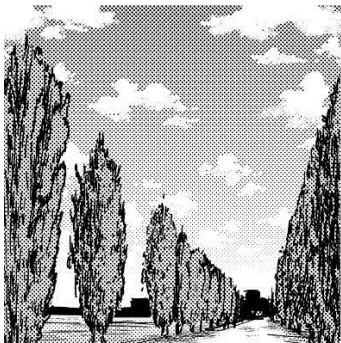
美しい景観が地球の財産だとすれば、企業の財産は「人」でしょう。

種差海岸がある八戸市に、人育てをモットーとする会社があります。昭和四十五年創業の近田会計事務所です。創業時わずか四名の所員のうち、三名は身内でした。現在の所長である近田雄一氏が入所した時、給料をもらえていたのは創業者の父と、一名の所員のみ。「同居だったので何とか生活ができました」と近田氏は振り返ります。

慎ましやかな家族経営に転機が訪れたのは、父の突然の入院でした。当時、仕事上で必要な書類に押印する権限は、一人だけ税理士の資格を持っていた父にありました。

近田氏は、書類を持って何度も病院と事務所を往復します。税理士がいないことの大変さを痛感すると共に、一人に任せざる運営で

## 雇用を生み、人を育てる 経営者の責任



絵・今谷 鉄柱

はなく、人がたくさんいてフォローし合える体制にすることを決意したのです。

父の後を継いだ近田氏は、事務所を大きくしていききました。年代によってスタッフの数が偏らないよう、まばらな状態にならないよう、毎年新規の雇用を続けました。

折しもデジタル化が加速する時代。次々と会計ソフトが開発され、人の代わりにパソコンが導入される割合が増えました。また、バブルの崩壊、長引く不況から、新しい人材を雇用するリスクもありました。

近田会計事務所でも、財務状況が逼迫する時期があつたそうです。そのような中、一貫して採用を続けました。その背景には、「人がいなくては仕事にならない」という創業時の苦い経験と、「地域のために働き口を作りたい」との強い思いがあつたのです。

「これからも雇用し、人を育て続けます」と話す近田氏。そして、「採用した以上は責任があります」との言葉通り、社員教育に力を注いでいます。毎日の朝礼をベースに、営業部門や顧客満足に関する部門などの委員会を作り、積極的に勉強会を行なっています。

近田氏は「人を育て続けなければ会社はもたない。仕事をするのは機械ではなく人だから」と語ります。今では、六十三名の所員を有する会計事務所となりました。

美しい景観も、人の手が入ることで保たれるように、会社の財産である人育ても、愛情に裏づけされた「教育」が不可欠なのです。